［ 別 紙 ２ ］

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

申請者氏名　孫　鏞勲

現在の歴史的集落における景観保全では歴史性を演出する傾向が強く、そのため景観保全を行うことが集落景観のパターン化や景観と生活と乖離を招き、景観が集落固有の歴史や文化を住民や来訪者に十分に伝えていないという問題が指摘されている。

そこで本研究は、韓国と日本の歴史的集落を対象とし、①韓国と日本の歴史的集落における制度と集落の空間構造に関する比較、②集落情報を伝える伝達媒体としての景観把握モデルの作成、③景観把握モデルを適用した事例研究、④景観管理方策のあり方に関する考察の４点を具体的な研究目的として設定し、第１章にとりまとめた。

2章では、韓国と日本における歴史的集落の景観保全に関する制度的手法と集落の空間構成を比較し、各々の特徴について論じている。保護制度の展開に関する比較では、日本では伝統的な要素を直接の保護対象とし要素間の景観的調和による景観管理を目指しているのに対し、韓国では史跡、民俗資料などの既存の文化財カテゴリーでの原型維持という方策を採っていると整理している。また集落の立地、空間秩序に関する比較では、韓国では集落を主導する両班階級を中心に集落形態が形成され、風水地理説によって家屋が道より優先して形成される特徴があり、日本では選択された立地条件や道環境に人々がどのように適応するかによって集落形態の特徴が形成される点を明らかにしている。

3章では、現状の景観管理の制度や実態の整理を踏まえ、集落情報の伝達に路上景観が果たす役割を理論的に示すための景観把握モデルを提案している。その結果、集落情報を伝える媒体としての景観把握モデルとして、見る主体に関わるものである「景観像」と「価値観」を『観者』、見られる対象に関わるものである「表層景」と「本質景」を『対象景観』に区分し、それらから構成されるモデルを提案している。そして本論文では、対象景観を、本質景である集落景観(Village Landscape)、表層景である路上景観(View on the Street)とに区分し、その両者の関係に注目して４章の事例分析を進めている。

4章では、路上からの集落全体の視認状況と集落空間の階層性の2つの観点から、日本の下郷町大内宿、白川村荻町、そして韓国の慶州市良洞村、安東市河回村の4事例を調査対象地として抽出し、各事例毎に集落景観の路上景観への表れ方を把握するとともに、近代におけるその変容を調査している。その結果、路上景観における集落景観の表れ方としては、集落景観が認識できる要所が存在する場合、路上景観の継起的な展開や階層的な展開に集落景観が表れる場合、そして場所毎の景観要素の組み合わせの差異に集落景観が表れる場合があることを明らかにしている。また、歴史的集落を取り巻く社会的状況の変化や環境条件の変化に伴い、現在では、路上景観と集落景観が乖離するケース、つまり路上景観から集落景観を認識することが難しくなっている実態を明らかにしている。

5章では、その原因を考察するとともに、これまでの研究結果を総合した上で韓国と日本における歴史的集落に関する既存の制度の問題と今後の管理方策を考察した。路上景観と集落景観との乖離の原因としては、両国ともに景観の管理の中で景観要素だけが注目され、景観要素間の関係に対する認識が薄いため、集落景観の有する構造性を路上景観において認識することが難しくなっていると考察している。したがって、路上景観が集落景観を正しく伝えるためには、重要な景観要素(Element)と同時に景観要素間の相互関係(Structure)を重視する必要があり、歴史的集落の管理方策において集落景観が読み取れるような路上景観の状態を維持することの重要性を指摘している。

6 章では、本研究で明らかになった成果をとりまとめ、今後の課題について論じた。

以上、本研究は人々が環境との関わりの中で形成してきた文化性や構造性を有した集落景観と、それを住民や来訪者に伝える役割を担う路上景観とに区分して着目し、集落景観と路上景観との関係を整理するとともに、両者が乖離しないような景観管理のあり方について論じたものと評価できる。本研究で得られた知見は、今後の歴史的集落保全に関する研究および実践に大きな影響を与えるものと考えられ、学問上応用上寄与するところが少なくないと判断される。よって審査委員一同は本論文が博士(農学)の学位論文として価値あるものと認めた。